

第四調

「スポタ」の大晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に主日の讚頌、第四調。

句、我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給へ。
ハリストス神よ、我等絶えず爾が生命を施す十字架に伏拜して、爾が三日目の復活を讚榮す。蓋全能の主よ、爾は此を以て人の朽ちたる性を新にして、我等に復天に升るを賜へり、獨仁慈にして人を愛する主なればなり。

句、爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。
救世主よ、爾は甘じて十字架の木の釘せられて、木の誠を犯しし罰を解けり、有能者よ、地獄に降りて、神として死の縛を断ち給へり。故に我等爾が死よりの復活に伏拜して、歡びて呼ぶ、全能の主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

第四調 「スポタ」の大晩課 七二三

第四調 「スポタ」の大晩課 七二四

主よ、爾は地獄の門を破り、爾の死を以て死の國を滅し、人類を朽壞より釋きて、世界に生命と不朽と大なる憐とを賜へり。

又 讚頌、アナトリーの作。

句、願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。
人人よ、來りて、救世主の三日目の復活を歌はん。我等此に因りて地獄の釋き難き縛より脱れ、皆不朽と生命とを受けて呼ぶ、十字架に釘せられ、瘞られて、復活せし獨人を愛する主よ、爾の復活を以て我等を救ひ給へ。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

救世主よ、諸天使及び人人は爾の三日目の復活を歌ふ。此に因りて地の極は照され、我等皆敵の奴隷より脱れて呼ぶ、生を施す全能の救世主、獨人を愛する主よ、爾の復活を以て我等を救ひ給へ。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。
ハリストス神よ、爾は銅の門を破り、柱を折きて、罪に陥りし人類を復活せしめ給へり。故に我等聲を合せて歌ふ、死より復活せし主よ、光榮は爾に歸す。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。
主よ、爾が父より生ることは年歳なくして永久なり、童貞女より身を取ることは人人の爲に測り難く言ひ難し、地獄に降ることは惡魔及び其使等の爲に懼るべし。蓋爾は死を踐みて、三日目に復活して、人人に不朽と大なる憐とを賜へり。

又生神女の讚頌、アモレイのパワエルの作。第八調。

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。
純潔なる生神女よ、爾の血より身を取りし萬有の神は爾を信者の爲には幟幟、患難急迫に在る者の爲には轉達及び扶助者、颶風に遇ふ者の爲には穩なる港と顯し給へり。故に爾凡そ爾の神聖なる幟幟の下に趨り附く者を諸の憂愁及び煩悶より救ひ給へ。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。
 至福なる女宰よ、我爾の神聖なる名を常に尊みて崇め、敬み讃めて歌はん。祈る、爾の帡幪の下に趨り附く我を諸敵の悦と爲さずして、爾の尊き祈祷の翼を以て常に我を悉くの誘惑より損はれざる者として護り給へ。
 句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

第四調 「スポタ」の大晩課 七二五

至淨なる神の母よ、慶べ、信者の倚頼よ、慶べ、世界の潔淨よ、慶べ、爾の諸僕を諸の憂愁より脱れしむる者よ、慶べ、死を滅して生活を興ふる者よ、慶べ、慰むる者よ、慶べ、轉達者よ、慶べ、避所よ、慶べ。

第四調 「スポタ」の大晩課 七二六

光榮、今も、生神女讃詞。

生神女よ、爾に因りて神の先祖と爲りし預言者ダウイドは、爾に大なる事を爲しし者に、爾の事を歌ひ呼べり、女王は爾の右に立てりと。蓋父なく爾より甘じて人の性を取りし神ハリストス、大にして裕なる憐を有つ主は、爾母を生命の中保者と現せり、是れ慾に朽ちたる己の像を改め、山の中に迷ひし羊を獲て、肩に置き、父の前に攜へ、己の旨に協はせ、之を天軍に合せて、世界を救はん爲なり。

次ぎて「穩なる光」。提綱、「主は王たり」。其他常例の如し。

挿句に主日の讃頌、第四調。

主よ、爾は十字架に上りて、我が原祖よりの詛を滅し、地獄に下りて、世世の囚囚を釋き、人類に不朽を賜へり。故に我等歌ひて、生命と救とを施す爾の復活を崇め讃む。

又 讃頌

句、主は王たり、彼は威嚴を衣たり。
 獨有能なる主よ、爾は木に懸けられて、悉くの造物を震はせ、墓に入れられて、墓に居る者を復活せしめて、人類に不朽と生命とを賜へり。故に我等歌ひて爾の三日目の復活を崇め讃む。

句、故に世界は堅固にして動かざらん。

ハリストスよ、不法の民は恩主に對して恩を知らざる者と顯れて、爾をピラトに解して、十字架に釘せん爲に定めたり。惟爾は甘じて葬を忍び、神として己の權を以て三日目に復活して、我等に終なき生命と大なる憐とを賜へり。

句、主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

女等は涙を流し墓に至りて、爾を尋ねしに、得ずして、歎き泣きて呼びて曰へり、哀しい哉我が救世主、萬有の王よ、爾如何ぞ竊まれたる、何の處か爾の生を施す身を隠す。天使は彼等に對へて曰へり、泣く勿れ、往きて傳へよ、主は復活して我等に喜を賜へり、獨仁慈の主なればなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

至りて玷なき者よ、爾の諸僕の祈祷を顧みて、堪へ難き攻撃を我等より退け、諸の憂苦を我等より遠ざけ給へ、我等は爾を一の堅固なる恃むべき錨として有ち、

第四調 「スポタ」の大晩課 七二七

爾の轉達を得たればなり。女宰よ、願はくは我等爾を呼ぶ者は耻を蒙らざらん、遄

第四調 「スポタ」の大晩課 七二八

に我が切なる祈を應へ給へ、蓋我等中心より爾に籲ぶ、女宰、衆人の佑助と、歡喜と、
庇護と、我等の靈の拯救なる者よ、慶べ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に、

主日の讚詞、第四調。

主の女弟子は復活の光る音を天使より聞き受けて原祖よりの定罪を振り棄て、使徒に誇りて曰へり、死は滅され、ハリストス神は復活して、世界に大なる憐を賜へり。

光榮、今も、生神女讚詞。

是れ古世より隠されて、天使等にも知られざる祕密なり、生神女よ、爾に藉りて神は混ぜざる合一を以て身を取りて、地に在る者に現れ、甘じて我等の爲に十字架を受け、此を以て始に造られし者を復活せしめて、我等の靈を死より救ひ給へり。



主日の早課

「主は神なり、我等に臨めり」、第四調。次に讚詞、「主の女弟子は」、二次。光榮、今も、生神女讚詞、「是れ古世より隠されて」。次に聖詠經の常例の誦讀。

第一の誦文の後に主日の坐誦讚詞、第四調。

攜香女は墓の門を見て、天使の光に堪へず、戦き驚きて云へり、豈盜賊の爲に樂園を開きし者は盗まれしか、或は苦の前に興くることを傳へし者は興きしか。實にハリストスは復活し、地獄に在る者に生命と復活とを賜へり。

句、主我が神よ、起きて、爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる毋れ。

第四調 主日の早課 七四三

第四調 主日の早課 七四四

救世主よ、爾は自由の旨に因りて十字架を忍び、死すべき人人は爾言にて四極を合成せし者を新なる墓に藏めたり。故に敵は縛られ、死は虜へられ、地獄にある者は皆爾が生命を施す復活に籲べり、生命を賜ふハリストス、世世に存する者は復活せり。

光榮、今も、生神女讚詞。

生神女よ、爾の聘定者及び守護者なるイオシフは天然に逾ゆる事を見て、驚き、爾の種なき懷孕に於て、毛に降りし雨、火に焼かれざりし棘、華を生ぜしアアロンの杖を思ひて、司祭等に證して呼べり、童貞女は生み、生みし後も恒に童貞女なり。

第二の誦文の後に主日の坐誦讚詞、第四調。

救世主よ、爾は不死の者として墓より復活し、爾の力を以て爾の世界を共に興せり、ハリストス我が神よ、爾は能力を以て死の權を滅せり、慈憐の主よ、爾は衆に復活を示し給へり。故に獨人を愛する主よ、我等爾を讚榮す。

句、主よ、我心を盡して爾を讚め揚げ、爾が悉くの奇迹を傳へん。

ガウリイルは上天の高きより降り、白衣にして、生命の石の在りし處の石に就きて、哭く者に呼べり、愛憐の情を抱く者よ、涕泣を止めて、勇めよ、蓋爾等が泣きて尋ぬる者は實に復活せり。故に使徒等に呼べ、主は復活せり、喜の音を受けて興きし者に伏拜せよ、勇めよ、エワも勇むべし。

光榮、今も、生神女讚詞。

いさぎよもの てんし ひんい みななんじ さん おそ おうみつ おどろ いかん ばんぶつ その て たも
潔き者よ、天使の品位は皆爾の産の畏るべき奥密に驚きたり、如何ぞ萬物を其手に保
つ者は人の如く爾の手に保たれ、永久の者は始を受け、凡そ呼吸ある者を言ひ難き仁慈
を以て養ふ者は乳にて養はるる。故に彼等は爾を眞の神の母として讚頌讚榮す。

「ネポロチニ」の後に應答歌、第四調。

ハリストスよ、爾の至榮なる復活に魁せし攜香女は、使徒等に爾が神として復活し、
世界に大なる憐を賜ひしを傳へたり。

ステパンナ アンティフォン
品第詞、第四調。第一偈和詞。毎句復唱す。

わ いとけな とお おお よく われ せ わ きゆうせいしゅ なんじみずか われ まも すく たま
我が幼き時より多くの慾は我を攻む、吾が救世主よ、爾親ら我を守りて救ひ給へ。
シオンを惡む者は主より辱を受けよ、爾等草の火に於けるが如く枯らされんとすれば
なり。

光榮

聖神にて凡の靈は活かされ、清淨を以て愈上り、三位の一體にて奥密にて照さる。

第四調 主日の早課 七四五

第四調 主日の早課 七四六

今も、同上。

アンティフォン
第二偈和詞

しゅ われたましい ふかみ ねつせつ なんじ よ ねが なんじ しんせい みみ われ き
主よ、我靈の深虚より熱切に爾に籲べり、願はくは爾の神聖なる耳は我にも聽かん。
凡そ主に於ける望を得たる者は悉くの憂ふる者の上在り。

光榮

聖神にて恩寵の流は注がれ、凡の造物に飲ませて、之を活かす。

今も、同上。

アンティフォン
第三偈和詞

ことば ねが わ ころ なんじ あ せぞく かび いつ そのたのしみ もつ われ よわ
言よ、願はくは我が心は爾に擧げられ、世俗の華美は一も其樂を以て我を弱めざら
ん。

人其母に愛を保つが如く、主に對して更に篤き情を保つべし。

光榮

聖神には神を識る知識と、明悟と、睿智との富は由るなり、蓋言は彼に因りて父の悉
くの命を露す。

今も、同上。

ゴロキメン
提綱、第四調。

主よ、起きて我等を助けよ、爾の憐に因りて我等を救ひ給へ。

句、「神よ我等は己の耳にて聞けり」。「凡そ呼吸ある者」。主日の早課の福音經。「ハリス
トスの復活を見て」。第五十聖詠。其他常例の如し。

カノン
主日の規程。ダマスクの聖イオアンの作。

第一歌頌

イルモス、古のイズライリは足を濡らさずして海の紅の淵を渡り、野に於てモイセイ
の十字形の手にてアマリクの力に勝てり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

主宰よ、爾は至淨なる十字架の木に上げられて、我等の墮落を改め、木に縁る殘害の傷
を醫し給へり、爾は仁慈全能の主なればなり。

像り難きハリストスよ、爾は體にて墓に在り、靈にて神として地獄に在り、盜賊と偕
に樂園に在り、父及び聖神と偕に寶座に在りて、一切を満て給へり。

生神女讃詞

爾は種なく父の旨を以て神聖なる神に由りて子を孕み、身にて生み給へり、是れ父より母なくして、我等の爲に爾より父なくして生れ給ひし主なり。

又十字架復活の規程、第四調。

第四調 主日の早課 七四七

第四調 主日の早課 七四八

第一歌頌

イルモス、我が口を開きて聖神に満てられ、言を女王母に奉り、楽しみ祝ひ、喜びて其奇迹を歌はん。

主よ、爾は人類の壞を醫して、爾の神聖なる血を以て之を新にし、昔爾の造物を壊りし力の強き者を壊り給へり。

爾の殺さるるは死者の復活と爲れり、蓋死は永遠の生命と闘ひて、殺す力を失へり、萬有を司る神が人體を取りたればなり。

生神女讃詞

爾の神聖なる活ける宮、爾を腹に宿しし童貞女、爾我が神の聖なる山は天軍に超えて美しき者なり。

又至聖なる生神女の規程、其冠詞は、至榮なる少女に第四の歌。第四調

第一歌頌

イルモス、童貞女より生れし主よ、祈る、強き軍たる我が靈の諸慾を無慾の深處に沈め給へ我が鼓を以てするが如く、肉情を殺すに由りて凱歌を爾に歌はん爲なり。

潔き者よ、爾の産を畏るるに因りて、人人は戦き、諸民は震ひ、諸國は動けり、蓋我が王は來りて、暴虐者を斃し、世界を朽壞より救ひ給へり。

最高きに居るハリストスは人人に降りて、己の居處を聖にして、動なき者と顯せり、蓋爾は獨造成主を生みて、生みし後にも童貞の寶を守り給へり。

第三歌頌

イルモス、ハリストスよ、爾の教會は爾の爲に楽しみて呼ぶ、主よ、爾は我が能力と避所と堡障なり。

生命の樹、神靈の眞の葡萄は十字架に懸りて、衆人に不朽を流し給ふ。

至大至嚴にして地獄の傲慢を倒しし主は不朽の神として今肉體を以て復活し給へり。

生神女讃詞

神の母よ、爾は獨地に居る者の爲に性に超ゆる諸福の中保者と爲れり、故に我等爾に慶べよを捧ぐ。

又

イルモス、生神女、生活にして盡きざる泉よ、祝ひて爾を讃め歌ふ者の靈を固め、彼等に爾が神妙なる光榮の中に榮冠を冠らしめ給へ。

救世主よ、蛇は毒に充ちたる齒を以て我を噛みたり、爾は、全能の主宰よ、爾の手の釘を以て之を折き給へり、人を愛する主よ、聖者の中に爾に超ゆる聖なる者なけ

第四調 主日の早課 七四九

第四調 主日の早課 七五〇

ればなり。

いのち たま じんあい しゅ なんじ あまん し はか お じごく もん ひら こせい
生を賜ふ仁愛の主よ、爾は甘じて死し、墓に置かれて、地獄の門を啓きて、古世より
の靈を釋き給へり、人を愛する主よ、聖者の中に爾に超ゆる聖なる者なければなり。

生神女讚詞

なんじ たがえ うね あらわ いのち ほ しょう たま こ およ ふし あずか もの ちゅうほうしや
爾は耕されぬ畝と顯れて、生命の穂を生じ給へり、是れ凡そ不死に興る者の中保者
にして、聖者の中に息ひ給ふ聖なる者なり。

又

イルモス、なんじ およそ しゅりよう うえ もの あまん たか ち くだ けんび ひと
爾は凡の首領より上なる者にして、甘じて高きより地に降りて、謙卑なる人
の性を最下なる地獄より升せ給へり、人を愛する主よ、爾の外に聖なる者なければなり。
しじょう どうていじょ なんじ よ がた しんせい ひ つつ せい きよ
至淨なる童貞女よ、爾に由りて勝へ難き神性の火に著きたる人の性は潔められて活かさ
る、蓋爾の内に奥密に焼かれたる餅は之を永生の爲に養ふ。
こ まこと かみ ちか もの たれ こ てんし ひんい こ どうてい かび もつ かがや ぜんとうしや はは
此の眞に神に近き者は誰ぞ、是れ天使の品位に超え、童貞の華美を以て輝き、全能者の母
として光る者なり。

第四歌頌

イルモス、きょうかい なんじ ぎ ひ じゅうじか あ み なら た ただ よ しゅ
教會は爾義の日は十字架に擧げられしを見て、並び立ちて正しく呼べり、主
よ、光榮は爾の力に歸す。
なんじ じゅうじか のぼ あまん き なんじ しじょう にくたい くるしみ もつ わ くるしみ いや たま
爾は十字架に升起りて、甘じて衣たる爾の至淨なる肉體の苦を以て我が苦を醫し給ふ。
ゆえ われら なんじ よ しゅ こうえい なんじ ちから き
故に我等爾に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸す。
しゅさい し なんじ つみ いのち ほどこ み の よろ かな ころ ちゆえ
主宰よ、死は爾の罪なくして生を施す身を呑みて、宜しきに合ひて殺されたり。故に
われらなんじよ しゅ こうえい なんじ ちから き
我等爾に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸す。

生神女讚詞

どうていじょ なんじ こんいん あずか う う のち また どうていじょ あらわ たま ゆえ
童貞女よ、爾は婚姻に與らずして生めり、生みし後にも亦童貞女と現れ給へり。故に
われら うたがひ しん もつ もだ こえ なんじ よ じよさい よろこ
我等疑なき信を以て黙さざる聲にて爾に呼ぶ、女宰よ、慶べ。

又

イルモス、よげんしや なんじ しじょうしや どうていじょ み と たま かみ はか がた ていせい
預言者アウワクムは爾至上者が童貞女より身を取り給ふ神の測り難き定制を
洞察して籲べり、主よ、光榮は爾の力に歸す。
みとお よ しゅ こうえい なんじ ちから き
ハリストスよ、律法に服したるイブライリは爾服せしめし神を識らざりき、乃律法
に對して不當なる者にして、律法に背きて、爾を罪犯者の如く十字架に釘せり。
たい ふどう もの りつほう そむ なんじ ざいはんしや ごと じゅうじか てい
救世主よ、爾の神成せられし靈は地獄の寶を掠めて、古世よりの靈を共に復活せし
め、生を施す體は衆に不朽を流せり。
きゅうせいしゅ なんじ しんせい たましい じごく たから かす こせい たましい とも ふっかつ
いのち ほどこ からだ しゅう ふきゅう なが

第四調 主日の早課 七五一

第四調 主日の早課 七五二

生神女讚詞

われら みななんじえいていどうじょ まこと しょうしんじょけんしんしや ため ひ うち あ や しじょう
我等皆爾永貞童女、眞の生神女見神者モイセイの爲に火の中に在りて焚かれざりし至淨
なる棘の預象せし者を讚榮す。
いばら よししょう もの さんえい

又

イルモス、こうえい うち しんせい ほうざ ざ かみ かる くも の ごと く て
光榮の中に神性の寶座に坐するイイスス神は、輕き雲に乗るが如く、朽ちざる手
に抱かれ來りて、ハリストスよ、光榮は爾の力に歸すと呼ぶ者を救ひ給へり。
いだ きた こうえい なんじ ちから き よ もの すく たま
見えざる者は見ゆる形に於て人と偕に在し、神性の悟られぬ者は爾少女より人體を受
けて爾潔き神の母を承け認むる者を救ひ給ふ。
なんじいさぎよ かみ はは う と もの すく たま
童貞女は形體の中に無形體の者、物體に與るを以て彼に由りて赤子と爲りし者を受けた
どうていじょ けいたい うち む けいたい もの ぶつたい あずか もつ かれ よ せきし な もの う

り。故に二性に於て一位にして、肉體ある神及び性に超ゆる人は識認せらる。
爾童貞女の内に入りて種なく生れ給ひし神言は、萬物の造成主及び主宰たるに因りて、
爾を産の時及び産の後に童貞女として護り給へり。

第五歌頌

イルモス、我が主よ、爾は光、信じて爾を崇め歌ふ者を聞き無智より引き出す聖なる光
にして、世界に來り給へり。

主よ、爾は慈憐に由りて地に降り、爾は木に擧げられて陥りし人の性を擧げ給へり。

ハリストスよ、爾は我が罪に因る罰を負ひ給へり、宏恩の主よ、爾は神聖なる爾の復活
を以て死の疾を除き給へり。

生神女讚詞

神の聘女よ、我等爾を敵に對して勝たれぬ武器として有つ、我等爾を堅固及び我が救
の冀望として得たり。

又

イルモス、萬物は爾が神妙の光榮に驚かざるなし、爾婚配を識らざる童貞女は至上の神
を孕み、永遠の子を生みて、凡そ爾を歌ふ者に平安を賜へばなり。

無知なる地獄は口を啓きて、全く爾を受けたり、蓋爾が十字架に釘せられ、戈にて刺
され、氣息なきを見て、活ける神を常人と思へり、惟爾の神性の能力を試みて悟れり。

不死にして人を愛する主よ、爾の身の毀たれたる殿を分ちし墓及び地獄は兩ながら強ひ
られて、一は爾の諸聖人の靈を放ち、一は其體を還せり。

生神女讚詞

第四調 主日の早課 七五三

第四調 主日の早課 七五四

視よ、今預言者の預言は應へり、蓋爾婚配を識らざる童貞女は至上の神を孕み、永遠の
子凡そ爾を歌ふ者に平安を賜ふ主を生み給へり。

又

イルモス、神は預言して云へり、我今起き、今光榮を獲、今高く擧がりて、童貞女より受
けたる陥りし者を我が神性の靈智なる光に擧げん。

潔き者よ、神の子は爾の内に入りて、爾を光榮の堂、神の聖山、聘女、宮、聖にせら
れし殿と爲し、我等の爲に永在の樂園と爲し給へり。

ハリストスよ、爾は童貞女の血より種なくして人體を受け給へり、是れ至淨にして實在
なる、明覺にして靈ある、自行、自願、自宰、自主の人體なり。

童貞女の腹は暴虐者の智慧を辱しめたり、蓋哺乳兒は手を靈を害する蝮の穴に入れ、
傲慢なる反離者を倒して、信者の足下に服せしめたり。

第六歌頌

イルモス、憐に由りて爾の脅より流れし血にて惡魔の祭の血より淨められし教會は爾
に呼ぶ、主よ、讚揚の聲を以て爾を祭らん。

爾は十字架に上り、力を帯びて、暴虐者と戦ひ、神として之を高さより墜し、勝たれ
ぬ力を以てアダムを復活せしめ給へり。

ハリストスよ、爾は美しく輝きて墓より復活して、爾の神聖なる力を以て諸敵を散
らし、神として衆を樂に充て給へり。

生神女讚詞

ああ しょ きせき こ あらた きせき どうていじょ おっと し たいない ばんゆう たも しゅ ほん
嗚呼諸奇跡に超ゆる新なる奇跡や、童貞女は夫を識らずして胎内に萬有を保つ主を孕み
て、狭からざりき。

又

イルモス、われうみ ふかみ いた おお つみ あらし われ しず じれん しゅ かみ よ
イルモス、我海の深處に至り、多くの罪の暴風は我を沈めたり、慈憐の主よ、神なるに由
りて、我が生命を深處より引き上げ給へ。
じごく そのくち ひら われ の むち たか しか くだ わ いのち
地獄は其口を啓きて我を呑み、無智にして高ぶれり、然れどもハリストスは降りて我が生命
を擧げたり、人を愛する主なればなり。

し よ し ほろ けだしし もの ふつかつ われ ふきゆう たま ふし しゅ おんなたち
死に因りて死は滅びたり、蓋死せし者は復活して、我に不朽を賜へり。不死の主は女等
に現れて、祝慶を宣べたり。

生神女讃詞

ああ しょうしんじょ なんじ ほん た がた しんせい いさぎよ やどりどころ あらわ てん ひんい おそれ
嗚呼生神女よ、爾の腹は勝へ難き神性の潔き宿處と顯れたり、天の品位は畏なく
して之を見るを得ざりき。

又 イルモス、同上。

むかしへび わ げんぼ よ われ いざな ころ いま いさぎよ もの われ つく しゅ
昔蛇は我が原母エワに依りて我を誘ひて殺せり、今は、潔き者よ、我を造りし主

第四調 主日の早課 七五五

第四調 主日の早課 七五六

なんじ よ われ きゅうかい よ おこ
は爾に依りて我を朽壞より喚び起せり。
しょうじょ じんじ ふち なんじえら もの い がた きせき ふち あらわ けだしちんじゅ
少女よ、仁慈の淵は爾選びたる者を言ひ難く奇跡の淵と顯せり、蓋珍珠たるハリスト
スは爾より神性の電にて輝けり。

小讃詞、第四調。

わ きゅうせいしゅおよ しよくざいしゅ かみ ち うま もの かせ と はか ふつかつ
我が救世主及び贖罪主は神として地に生れし者を桎梏より釋きて、墓より復活せしめ、
じごく もん やぶ しゅさい みつかめ ふつかつ たま
地獄の門を破りて、主宰として三日目に復活し給へり。

同讃詞

われら ち うま もの みな いのち たま し ふつかつ みつかめ はか い おのれ
我等地に生るる者は皆生命を賜ふハリストス、死より復活して三日目に墓より出で、己
の力を以て死の門を破り、地獄を殺し、死の刺を折き、アダムをエワと偕に釋きたる主
を歌ひて、熱心に讚美を奉らん。蓋彼は獨一有能なる神及び主宰として三日目に復活
し給へり。

第七歌頌

しょうしや しょうしや いろり あ ほのお つよ けいけん あい や
イルモス、アウラムの少者はペルシヤの爐に在りて、焰よりも強く敬虔の愛に熱か
れて呼べり、主よ爾が光榮の殿に於て爾は崇め讃めらる。

しんせい ち もつ たら ふきゆう め じんらい かんしや うた しゅ なんじ
ハリストスの神聖なる血を以て洗はれて不朽に召されたる人類は感謝して歌ふ、主よ、爾
が光榮の殿に於て爾は崇め讃めらる。

われら ふつかつ みなもと なんじ はか いのち ほどこ もの じどう うるわ もの じつ
ハリストスよ、我等の復活の源たる爾の墓は、生命を施す者、地堂より美しき者、實
に凡の王の宮よりも光れる者として現れたり。

生神女讃詞

しょうしや せい しんみょう すまい よろこ けだししょうしんじょ なんじ よ よろこび か よ
至上者の聖にせられたる神妙の居處よ、慶べ、蓋生神女よ、爾に縁りて欣喜は斯く呼
ぶ者に賜はりたり、至りて無玷なる女幸よ、爾は女の中に祝福せられたり。

又

けいけん もの ぞうぶつしゅ か ぞうぶつ つか ひ おどし いさ ふ
イルモス、敬虔の者は造物主に易へて造物に事ふることをせざりき、火の嚇を勇ましく踐
みて、喜び歌へり、讚美たる主、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

ひと すく しゅ なんじ き あ おご め ひく たか まゆ ち くだ さんび
人を救ふ主よ、爾は木に擧げられて驕れる目を低くし、高ぶれる眉を地に下せり。讚美

たる主、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。
死より復活して、地獄に囚はれたる無数の人人を出しし主宰よ、我等爾に事ふる者の角
を爾の力を以て高くし給へ。讃美たる主、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

聖三者讃詞

われら神聖なる宣言に遵ひて、唯一の神、三光に於て混淆なく分離なくして輝く主、萬物
を照す永久の光焰を讃美して呼ぶ、神よ、爾は崇め讃めらる。

第四調 主日の早課 七五七
第四調 主日の早課 七五八

又

イルモス、三人の少者はワフィロンに於て窘迫者の命令を空言と爲して、焰の中に呼べ
り、主我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。
我が心に燃ゆる愛の火は我を生神女を歌ふ爲に進めて、母及び童貞女に呼ばしむ、恩寵
を蒙れる者よ、萬軍の主は爾と偕にす。
生神女よ、爾は造成主及び主宰を生みて、造物より最高き者と現れたり。故に我等爾
に呼ぶ、恩寵を蒙れる者よ、萬軍の主は爾と偕にす。

聖三者讃詞

われは爾獨一の主を三の分れざる聖なる位に於て尊み、三位の神性を歌ひて呼ぶ、萬有
を宰る三者よ、爾は崇め讃めらる。

第八歌頌

イルモス、ダニエルは獅子穴に在りて手を伸べて、獅子の口を閉し、敬虔の篤き少者は徳
を帯び、火の力を滅して呼べり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。
主宰よ、爾は十字架に手を伸べて萬民を集め、爾を讃頌する唯一の教會を顯して、
在地在天に同心に歌はしむ、主の悉くの造物は主を崇め、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。
白衣にして復活の近づき難き光に輝ける天使は女等に現れて呼べり、何ぞ生ける者を
死者の如く墓に尋ぬる、ハリストスは實に興きたり、我等彼に呼ばん、悉くの造物は主
を歌ひて萬世に讃め揚げよ。

生神女讃詞

至淨なる童貞女よ、爾は獨萬族の中に神の母と現れたり、純潔なる者よ、爾は神性の
居處と爲りて、近づき難き光の火に焚かれざりき。故に神の聘女マリヤよ、我等皆爾を崇
め讃む。

又

イルモス、生神女の産は敬虔の少者を爐の中に守れり。其時に預め徹され、今已に應
ひし此の産は全世界に勧めて爾に歌はしむ、造物は主を歌ひて、萬世に彼を讃め揚げよ。
ハリストスよ、造物は爾が非義に屠らるるを見て、哀しみて哭けり、地は悶え、日は黒衣
の如く晦冥を衣たり、我等は絶えず爾を歌ひて世世に崇め讃む。
我に降りて地獄にまで至り、衆の爲に復活の途を闢きし主よ、爾は復しり、我を肩に任
ひて父に攜へ給へり。故に我爾に呼ぶ、造物は主を歌ひて萬世に讃め揚げよ。

第四調 主日の早課 七五九
第四調 主日の早課 七六〇

聖三者讃詞

われら げんし ちえ およ ばんゆう げんいん ゆいいち じざい ちち わげん ことば およ ぶじゆつしゃ しん ばんゆう
我等は原始の智慧及び萬有の原因たる惟一自在なる父、無原の言、及び撫恤者たる神、萬有
の獨一の神を讚榮し、合一なる三者に伏拜して、萬世に之を崇め讚む。

又

イルモス、衆人の贖罪主全能者よ、爾は降りて、焰の中に敬虔を守りし者に露を注ぎ
て、歌はしめ給へり、悉くの造物は主を歌ひて崇め、讚めよ。
爾をアダムの肋骨より造りし萬有の主は爾の童貞より身を取り給へり。我等彼を歌ひ
て呼ぶ、悉くの造物は主を崇め、歌ひて、世世に彼を讚め揚げよ。
生神女よ、アウラムは幕に在りて爾に於ける奥密を見たり、蓋彼は爾の無形の子を接
けて歌へり、悉くの造物は主を崇め、歌ひて、世世に彼を讚め揚げよ。
少女よ、爾の童貞の預象は聖三者と同數なる少者を救へり、蓋彼等は童貞の身を以て焰
を踐みて呼べり、主を崇め、歌ひて、世世に彼を讚め揚げよ。

第九歌頌

イルモス、童貞女よ、手にて斫られざる隅石ハリストスは、爾斫られざる山より斫り分
けられて、離れたる性を合せ給へり。故に我等樂しみて、爾生神女を崇め歌ふ。
我が神よ、爾は全き神性を以て混淆せざる合一に於て全き我を受けて、多くの慈憐に由
りて身にて十字架に忍びたる爾の苦を以て全き我に救を賜へり。
爾の門徒は爾の墓の啓かれ、爾の復活に由りて神の身を裹みし布の空しくなりたるを見
て、天使と偕に呼べり、主は實に興き給へり。

聖三者讚詞

われら しゅうしんじや しんせい ゆいいつ さんい かみ ふくはい こんこう くらい おい どうのう どうそん
我等衆信者は神性の惟一にして三位なる神に伏拜して、混淆せざる位に於て同能同尊な
る父、子、聖神を尊みて、崇め讚む。

又

イルモス、凡そ地に生るる者は聖神に照されて樂しみ、形なき智慧の性も祝ひ、神の母
の聖なる祭を尊みて呼ぶべし、至りて福なる潔き生神女、永貞童女よ、慶べよ。
蛇は匍ひ近づき、欺を以て我を擄へて、エデムより出せり、全能の主は髑髏の處の堅
き石に彼を嬰兒の如く撃ち殺し、十字架の木を以て我の爲に復樂園の門を啓き給へり。

第四調 主日の早課 七六一

第四調 主日の早課 七六二

ハリストスよ、爾は敵の固を破り、全能の手を以て其富を掠め、我を地獄より引き出し、
昔の甚しく誇る者を辱め給へり。

仁慈なるハリストスよ、爾の卑微なる民を顧みて諸難より救ひ、爾の權能の手を以て我
が皇帝を堅め、爾の選びたる嗣業を諸敵より護り給へ、爾は仁愛の主なればなり。

又

イルモス、至淨なる童貞女よ、神の言ひ難き祕密は明に爾に於て行はる、蓋神は慈憐
に由りて爾より身を取りて生れ給へり。故に我等爾を生神女として崇め讚む。
聖神の裝飾せし紫袞衣を衣たる至淨なる童貞女よ、我等爾を棘の中に耀く百合花、忠信
に爾を讚め揚ぐる衆人を芳しき香に満つる者として觀る。
純潔なる者よ、不朽なる主は爾の腹より朽壞すべき人の性を取りて、仁慈に由りて之
を己の内に不朽なる者と爲し給へり。故に我等爾を生神女として崇め讚む。
萬物の女宰たる者よ、爾の民に勝利を與へて、敵を教會と和せしめ給へ、我等が爾を

しょうしんじょ あが ほ ため
生神女として崇め讃めん爲なり。

カタワシヤ

共頌の後に小聯禱、及び 主我等の神は聖なり、次に光耀歌。光榮、今も、生神女讃詞。

「凡そ呼吸ある者」に主日の讃頌、第四調。

句、彼等の爲に記されし審判を行はん爲なり。斯の榮は其悉くの聖人に在り。

十字架と死とを忍び、死より復活せし全能の主よ、我等爾の復活を讃榮す。

句、神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ。

ハリストスよ、爾は十字架にて我等を古の詛より解き、爾の死にて我等の性を苦しむる悪魔を空しくし、爾の復活にて萬有を歡喜に満て給へり。故に我等爾に呼ぶ、死より復活せし主よ、光榮は爾に歸す。

句、其權能に依りて彼を讃め揚げよ、其至嚴なるに依りて彼を讃め揚げよ。

ハリストス救世主よ、爾の十字架にて我等を爾の眞理に導きて、敵の網より脱れしめ給へ。死より復活せし仁愛の主よ、爾の聖人の祈禱に因りて爾の手を伸べて、罪に陥りし我等を起し給へ。

句、角の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。

神の獨生の言よ爾は父の懷を離れずして、人を愛するに因りて地に來り、變易せ

第四調 主日の早課 七六三

第四調 主日の早課 七六四

又讃頌、アナトリーの作。同調。

ずして人と爲れり。神の性には苦に與らざる者にして、身にて十字架と死とを忍び、死より復活して、人類に不死を賜へり、獨全能の主なればなり。

句、鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。

救世主よ、爾は身にて死を受けたり、我等に不死を得しめん爲なり、墓に入りたり、我等を地獄より脱れしめて、己と偕に復活せしめん爲なり、爾は人として苦を受け、神として復活し給へり。故に我等呼ぶ、生命を賜ふ主、獨人を愛する者よ、光榮は爾に歸す。

句、和聲の鉞を以て彼を讃め揚げよ、大聲の鉞を以て彼を讃め揚げよ。凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ。

救世主よ、爾の十字架が髑髏の處に樹てられし時、磔は裂けたり、爾が死者として墓に藏められし時、地獄の門衛は懼れたり、蓋爾救世主よ、死の權を空しくして、爾の復活にて悉くの死者に不朽を賜へり。生命を賜ふ主よ、光榮は爾に歸す。

句、主我が神よ、起きて、爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる毋れ。

ハリストス神よ、女等は爾の復活を觀んと欲せしに、先づマリヤ「マグダリナ」來りて、

石の墓より移され、天使の坐せるに遇へり、彼女に謂ふ、爾等何ぞ生ける者を死者の中に尋ぬる、彼は神として復活し給へり、萬民を救はん爲なり。

句、主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。

イウデヤ人よ、言ふべし、爾等が守らんと定めしイエスは安にか在る、爾等が墓に置きて、石に封印せしものは安にか在る、生命の主を諱みし者よ、死者を與へ、葬られし者を與へよ、或は復活せし者を信ぜよ。若し爾等主の復活に於て黙さば、石は呼ばん、殊に墓より移されし者は然せん。我が救世主よ、爾の仁慈は大なる哉、爾の定制の奧義は大なる哉、光榮は爾に歸す。

光榮、早課の福音の讚頌。今も、生神女讚詞、「生神童貞女よ、爾は至りて讚美たる者なり」。大詠頌。

詠頌の後に復活の讚詞
主よ、爾は墓より復活して、地獄の鎖を壊り、死の定罪を滅し、衆人を敵の網より救へり。獨大慈憐なる者よ、爾は使徒に顯れて、彼等を傳教に遣し、彼等に依りて爾の平安を世界に賜へり。

次ぎて聯禱及び發放詞。其後第一時課、其他常例の如し、并に最後の發放詞。



第四調 主日の早課 七六五
第四調 主日の聖體禮儀 七六六

聖體禮儀には眞福詞、第四調。

アダムは木に縁りて樂園より出され、盜賊は十字架の木に縁りて樂園に入りたり。彼は食して造物主の誠に背き、此は共に十字架に釘せられて、隠れたる神を認めて籲べり、爾の國に於て我を憶ひ給へ。

句、心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。
十字架に擧げられて死の力を滅し、神として我等の罪の書券を抹しし獨一仁愛の主よ、我等信を以て爾に事ふる者にも盜賊の痛悔を與へ給へ、蓋我等爾に呼ぶ、ハリストス我が神よ、我等をも爾の國に於て憶ひ給へ。

句、和平を行ふ者は福なり、彼等神の子と名づけられんとすればなり。
人を愛する主よ、爾は十字架に於て我を以て我等の罪の書券を破り、死者の中に入りて彼處の暴虐者を縛り、爾の復活を以て衆人を地獄の械繫より釋き給へり。我等是に照されて爾に呼ぶ、我等をも爾の國に於て憶ひ給へ。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の者なればなり。
十字架に釘せられ、全能なるに因りて、三日目に墓より復活し、始めて造られしアダムを復活せしめし獨一不死の主よ、我をも痛悔に向はせ、心を全うして、熱き信を以て、常に爾に籲ばしめ給へ、救世主よ、爾の國に於て我を憶ひ給へ。

句、人我の爲に爾等を詬り、窘逐し、爾等の事を諷りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

苦に與らざる主は我等の爲に苦に與る人と爲り、甘じて十字架に釘せられて、我等を己と偕に復活せしめ給へり。故に我等は十字架と共に苦及び復活を讚榮す、此等に由りて我等は新に造られ、此等に由りて救はれて呼ぶ、我等をも爾の國に於て憶ひ給へ。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。
我等信者は、死より復活して、地獄の權を虜にし、攜香女に現れて、慶べよと云ひし主に、我が靈を滅亡より救はんことを祈りて、善智なる盜賊の聲を以て恒に彼に籲ばん、我等をも爾の國に於て憶ひ給へ。

光榮、聖三者讚詞。

我等衆信者は、宜しきに合ひて同意に父、子、聖神を讚榮するを得ん爲に祈らん。惟一の神性は三位に於て混淆なく、分離なく、單一にして近づき難し、我等は彼に由りて火の

くるしみ すく
苦より救はる。

今も。生神女讃詞。

第四調 主日の聖體禮儀 七六七

第四調 主日の晩課 七六八

ハリストスよ、われら^{われら}は身^みにて種^{たね}なく爾^{なんじ}を生^うみし爾^{なんじ}の母^{はは}、産^{さん}の^{のち}後^{じつ}にも實^{ふきゆう}に不朽^{どうてい}なる童貞^{じよ}女^{じよ}
に止^{とど}まりし者^{もの}を轉^{てん}達^{たつ}者^{しや}として爾^{なんじ}に進^{すす}む。慈^じ憐^{れん}多^おき主^{しゆ}宰^{さい}よ、我^{われ}等^らをも爾^{なんじ}の國^{くに}に於^{おい}て憶^{おも}ひ給^{たま}
へと常^{つね}に呼^よぶ者^{もの}に諸^{しよ}罪^{ざい}の赦^{ゆるし}を與^{あた}へ給^{たま}へ。

ボロキメン
提綱、第四調。

主^{しゆ}よ、爾^{なんじ}の工^{しわざ}業^なは何^おぞ多^{みな}き、皆^{ちえ}智^{もつ}慧^{つく}を以^わて作^{たま}れり。句、我^{われ}が靈^{たましい}よ、主^{しゆ}を讚^ほめ揚^あげよ、主^{しゆ}我^{われ}
が神^{かみ}よ、爾^{なんじ}は至^{いた}りて大^おなり。

「アレルイヤ」、神^{かみ}よ、爾^{なんじ}の寶^{ほう}座^ざは世^よ世^あに在^{なんじ}り、爾^{なんじ}の國^{くに}の權^{けん}柄^{べい}は正^{せい}直^{ちよく}の權^{けん}柄^{べい}なり。句、爾^{なんじ}
は義^ぎを愛^{あい}し、不^ふ法^{ほう}を惡^{にく}めり。

~~~~~